



家森信善著『基礎からわかるマクロ経済学』

秋山, 優

(Citation)

国民経済雑誌, 214(2):91-95

(Issue Date)

2016-08-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0040990>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0040990>



家森信善著
『基礎からわかるマクロ経済学』

秋 山 優

国民経済雑誌 第214巻 第2号 抜刷

平成28年8月

書

評

家森信善著

『基礎からわかるマクロ経済学』

中央経済社，第4版，2015年，210頁

はじめに

大学の授業形態が通年型であった時には，何らかの理由で授業についてゆけず，後れを取った受講生にもキャッチアップする機会が幾度かは与えられていたように思う。たとえば，中間試験であまりの出来の悪さに目が覚め，後期からは改心し，まじめに授業に出席するようになったとか，期末試験が近づく冬季休暇中に急に大学図書館通いを始めたとかである。しかしながら，当時は今と異なり，図書館や書籍部にも経済学の初級テキストと呼べるものが極めて少なく，一人で自習するのに大変苦労したことを覚えている。

とくに，数式やグラフがたくさん出てくる理論系の経済学の授業では，内容の理解に苦戦し，同じ受講生仲間や部活動の先輩達から試験前に直接教わることが，筆者(私)のような学習意欲が低く，また理解するのに時間が掛かる学生にとっては，とても効果的で，目から鱗が落ちる気がしたものである。今の言葉でいえば，まさに「ピア・サポート」あるいは「グループ学習」であるが，そのために，何か解りやすい教科書はないものかと，皆で手分けして探した思い出がある。

その後，卒業論文の資料探しの時に，大学図書館書庫所蔵の原著を見て，米国の大学にはこれほどまでに理解しやすいテキストがあるのかと愕然とした。

本書は，初めてマクロ経済学を学ぶ学生にとっても，自学自習が可能であるように作成された，極めて解りやすい最良のテキストであろう。筆者は，本書の初版発行後ほどなく街中の本屋で偶然手にして以来，その想いは変わらず，1・2年次配当のマクロ経済学系の授業科目を担当するときには，必ずテキストとして指定してきたが，その理由は，本書の構成とその内容にある。

本書の概要・構成

本書は，基礎的なマクロ経済分析の理解に欠くことのできない，IS-LMモデルを解説するために全13章のほぼすべてを費やし，同モデルの開放体系版であるマンデル＝フレミングモデルまでを解説の範囲と限定しているが，これは，初学者に学問的な消化不良を起こさせないように配慮した著者の明確な意図の表れであろう。

導入部では，まず第1章で，マクロ経済学とミクロ経済学のアプローチや分析対象の違いを説明し，身近なマクロ経済的な問題を紹介することから始めている。第2章では，経済成長率や，失業率，物価，株価，さらに為替レートなど，学生がニュースや報道でしばしば見聞きしている(はずの)主要なマクロ経済変数を順次，手際良く紹介している。

初級教科書にとって、この導入部分は非常に重要で、大切な位置付けとなっている。なぜなら、読者たる学生達の心を掴み、この先を読み進めたいくなるようなヤル気を起こさせなければならないからである。とくに、経済学を学ぶつもりなどない、不本意ながら当該大学の学部・学科に入学してきた学生にとっては、あまりに味気ない抽象的なモデルの解説から始まれば、それがたとえ非常に解りやすい書き方であっても、ヤル気が起きなくなってしまうかねないのである。むしろ、専門的な香りが少し漂う中で、身近な問題を対象として実際のデータなどと関連付けながら興味を引く内容となっているのが理想であるが、本書は、必要最小限の解説で、この目的を達成しているといえよう。

第3章は、代表的なマクロ集計概念である国内総生産（GDP）を紹介し、付加価値、所得の発生、所得の分配と使用（支出）について述べ、GDPの三面等価と名目GDPと実質GDPの違いについて解説している。国民経済計算のフレームワーク全般に関する説明が、筆者にはやや言葉足らずにも思えるが、それは、本書全体に行き渡る「必要最小限の概念と知識の理解」が徹底しているためである。必要とあれば、追加的資料を配布し、補足説明をすることによって、受講する学生には、「授業に出席していればもっと解るようになる」ことが実感できるのであるから、それこそ授業担当者の腕の見せ所となるであろうし、教育力を磨く機会が与えられていると解釈することもできよう。

さて、ここまでの準備を土台として、本書では以下、第4章で消費と貯蓄、第5章で民間投資、第6章で政府支出と、海外との取引が一切ないものと仮定する閉鎖経済の想定下での総需要の各項目について、その決定メカニズムが順次解説されてゆく。初めてマクロ経済学を学ぶ者にとって、すんなりとは理解できないような最初の壁となるであろう「投資の限界効率」は、具体的な模擬例を挙げて、丁寧に解りやすく解説され、投資の決定メカニズムにおいて金利の果たす役割がよく理解できるように多くの紙数を割いている。

本来ならば、この後、直ちにIS曲線の導出に進みたいところであるが、著者は、第7章において、いわゆる45度線分析に戻り、生産物市場の需給均衡の理解を優先させ、知識の消化不良に陥らないよう配慮している。その上で、章末において、金利や、物価、あるいは海外との取引に関する「議論の単純化のための仮定」を見直すことが、モデルの自然な拡張につながることを示し、本書の後半部への期待を読者に抱かせるようにしている。

難解と思われる部分については、躊躇わずに紙数を割いて丁寧に解説することを心掛ける一方で、貨幣の需要と供給の説明を第8章のみで済ませたのは、金融論の著名な研究者である著者の手際の良さとしか言いようのない鮮やかさである。貨幣の役割、貨幣の範囲、信用創造、貨幣の需給均衡から金融政策の諸手段までを、わずか17ページからなる一つの章で駆け抜けた。

第9章で生産物市場と貨幣市場の同時的均衡を表すIS-LMモデルを完成させ、第10章で、それを用いた分析の手法を紹介し、財政政策と金融政策に関するマクロ経済政策の有効性についてそれぞれ解説している。金融緩和と利下げの関係や財政支出増と新規国債発行および利上げの関係を知った読者たる学生は、かなり現実味を帯びた議論展開に触れることができるようになったことを、ここではじめて実感するようである。なぜなら、追加資料として配布する新聞記事を抜粋した講義資

料に目を通し、次週講義で忘れずに持参する受講生が明らかに増えてくるからである。

第11章においては、第7章の章末で述べられたように、議論の単純化を図るべく仮定を設定したモデル分析の限界を再び顧みて、物価がさしあたり一定であるとの想定についての問題意識からIS-LMモデルに物価の変動を織り込み、総需要・総供給分析へと拡張している。さらに、議論の単純化のためとはいえ、海外との取引が一切存在しないと仮定する強烈的な「閉鎖経済の想定」の下でのIS-LMモデルを、財貨・サービスの輸出入と海外との資本移動とが可能であるような開放体系へと拡張し、国際版IS-LM分析として紹介したのが第12章である。ここに至って、読者は、為替レートの動きにも触れることができるようになり、複雑な現実経済を解剖するための初歩的な技術を学ぶおもしろさに気付くことができるようになるだろう。

最後に第13章では、実際のデータを駆使して、IS-LMモデルを構成する変数や線形関数で表される体系をそれぞれ特定化し、最も簡単なIS曲線、LM曲線金融・財政政策の効果を体験することができるようになってきている。

なお、第4版では、各章末に「チャレンジ：挑戦してみよう」のコーナーが設けてあり、上級学年のゼミナールの演習課題としても最適な興味深い例題が提供され、卒業するまで本書を活用できるようになっている。

以上、本書の章構成について紹介してきたが、今、改めて読み返してみると、とくに奇を衒った章立てが用意されているわけではなく、むしろマクロ経済学の標準的な入門書としての構成になっていることに気付かされる。しかしながら、このことは、本書が刊行されて以来、それ以降に出版された初級テキストの模範例の一つとなったからではないかと感じている。初版が出版されたときには、IS-LMモデルの理解までに範囲を限定し、枝葉を切り払うかのように内容を精選し、難易度を極力下げて、解りやすく丁寧な表現で解説するというスタイルは、当時としては斬新であり、挑戦的であったとさえいえよう。

本書の特徴と貢献

高等教育機関の関係者によって、大学入学後の初年次教育の重要性が指摘され、また、専門教育への導入部分が再認識されるようになったのには、さまざまな理由や背景がある。大学への進学率が上昇し、今や高等学校を卒業する生徒の半数近くが大学に入学する時代になる一方で、入学時の基礎学力の低下が指摘され、中・高等教育の不連続性が課題となっており、高大接続の在りようが各大学においても真剣に議論されつつある。

しかしながら、この問題は、筆者が学部学生だった70年代後半から80年代初頭にも、キャンパス内では既に指摘されていたことであったし、誤解を恐れずに言うならば、わが国だけに限った課題でもない。現在のように、高等教育界全体に関わる社会的な問題とならなかったのは、大学生の数それ自体が今よりはずっと少なく、その兆候がやっと見えたに過ぎなかったからかもしれない。日本経済の失われた20年と似た表現で、70年～90年に何らの対策も考えず、手を拱いていたという意味で、わが国の高等教育の空洞化の時代と指摘する声も上がっているくらいである。

しかしながら、理由や背景はともかく、大学が直面している解決すべき問題は、入学した学生達

が学ぶ環境を整え、カリキュラムを見直し、足らざるを補い、如何にして人材として学生を育てるかである。したがって、初年次教育や専門教育への導入教育の部分は、カリキュラム上とても重要であるし、そこに位置付けられる授業科目のシラバスには、さまざまな工夫や仕掛けが必要であろう。座学による授業科目においてさえ、受講学生がヤル気になってアクティブにラーニングするよう、一方通行的なレクチャー型講義よりも課題解決型の授業内容や反転授業が推奨され、グループワーク型の授業が増えつつある。

カリキュラムの全体像の中で、かなりの部分を、積み上げ型の知識習得を必要とする経済学においては、その導入部分ではとくに、上記のようなさまざまな授業形態・内容で利用できる良質な教材としてのテキストが求められている。

以下では、筆者が重要であると考え、教科書のチェックポイントを列挙してみたい。

- (1) 初級テキストあるいは入門編には、必要最小限の基本的事項や概念が手順良く紹介され、小さな階段を次々に上るがごとく徐々に読者の理解が進むように構成されていることが求められる。何よりも消化不良に陥らないよう、腹八分目で良しとしているからこそ、本書で利用される関数は、非線形ではなく、すべて線形である。
- (2) しかも、解りやすく、かつ、学術的にも正確な記述内容であることが必要である。読者に易しい書き方を追求するあまり、正確さを欠いてしまうことになれば、誤解が生じ、その後の理解の妨げになりかねないのである。使用される記号、方程式、グラフや表の一つに至るまで配慮が必要である。
- (3) 理論の教科書といえども、できるだけ身近な問題や具体的事例を取り上げ、実際のデータを見せながら実証分析にも触れつつ、学習が進行するように配慮されているのが望ましい。抽象的な理論の世界は、初学者には難解そのものであるから、読みながら想像するに難くないような、あるいは目で見て確認できる状況の中で解説されている必要がある。
- (4) 読み進むにつれても、急に難しくなることがないような構成となっていなければならない。ただし、この姿勢を最終章まで貫き通すには、著者の相当な覚悟と技量が求められよう。もちろん、すべてを丁寧に解説してゆけば、それだけ紙数が嵩み、分厚く高価なテキストとなってしまう。したがって、当該テキストの守備範囲に関しては、思い切りよい判断がなされ、その範囲内で記述内容と構成において、丁寧さと解りやすさのバランスが取れていなければならないのである。
- (5) さらに欲を言えば、当該授業科目の前置あるいは併設の授業科目や後続関係にある授業科目でも使用できるテキストであれば、コスト・パフォーマンスの面からも有り難い。一方で、1冊の書籍代が2,500円を超えるあたりから、学生はテキストを購入するのを躊躇うようになるようである。初級ミクロ経済学の例題ではないが、厳しい予算制約に直面しつつ、できるだけ高い効用を得たいと買い手は願っているのである。

今や入門的教科書は数多く出版されてはいても、以上のような条件を満たしているテキストは決して多くはない。本書は、これらの条件を満たしつつ、しかも状況に応じて使い分けができるなど極めて利便性が高いのである。

たとえば、半期2単位の授業科目を想定すれば15週の授業回数であるから、全13章からなる構成は、授業担当者の自由裁量により補足する回数部分を含めれば、一冊をちょうど使い切ることができる。もっと時間をかけて授業を進めたいのであれば、第7章までの前半部分を「マクロ経済学入門」とし、後半部分を「マクロ経済学Ⅰ」などのように積み上げ型授業科目として設定し、どちらでもテキストとして指定すれば学生の負担は少なくて済む。本書の記述が解りやすく、丁寧であるので、各回の授業の事前・事後の学習にも最適で、したがって、反転型授業の教材としても利用できるのである。

結 び

本書は、それまでの経済学テキストの内容を一変させ、その後に出版された数多くの入門書の先駆けとなった感がある。すなわち、さしたる予備知識のない学生にとっても読みやすいように、範囲を限定し、つねに現実の経済問題に触れながら、それらを解き明かす手段としてマクロ経済学の分析ツールを理解しやすいよう平易に解説し、自学自習も可能なように配慮されたテキストである。

本書は、幾つもの大学等の高等教育機関において教科書や参考図書として指定され、数多くの学生によって購読されているからこそ増刷され、また内容を更新しながら版を重ねて15年に亘って支持されてきたのである。2001年に初版を刊行して以来、姉妹書の『基礎からわかるミクロ経済学』とともに数十校の大学でテキストとして使用されてきたという。

授業担当者としても、これほど使いやすい教科書に巡り合うことは稀である。筆者も幾度か、研究者仲間で経済学の初級教科書を分担執筆する機会をいただいたが、喧々諤々意見を交わし慎重に調整を重ねても、いざ授業で使用してみると自身の分担箇所も含めて所々不便があつて、なかなか皆が満足することに至らなかったという苦い経験がある。執筆者でさえ不便を感じるのであるから、初めて手に取って読みだした学生にしてみれば尚更であろうことは容易に推察できる。

今春、同書初版に学んだ学生がまた一人、大学の専任教員としての道を歩み始めたが、良著に巡り合い、目覚めと気づきでヤル気になって急速に伸び始めたころを思い返すと、専門基礎への導入部分を含めた初年次教育の大切さを改めて実感せざるを得ない。

(秋山 優)